

主 題：我が人生に悔いなし

聖書箇所：ピリピ人への手紙 2章12-18節

いつからでしょうか？病院を訪問すると、クオリティ・オブ・ライフということばをよく耳にするようになりました。人生は長さよりも質が問題であると、どれだけ長く生きるかよりも、その中身が問題だと言うのです。すなわち、どのように生きるかが重要であるというわけです。まさにこれは、私たちイエス・キリストを信じる信仰者が真剣に考えなければいけないことです。どれだけ長く信仰生活を生きるかよりも、どんな信仰生活を生きるかです。無駄に人生を過ごしたくない、そのことを私たちは前回から見てきました。今日も私たちは、この残された短い人生を無駄に過ごさないためにどうすればいいのか、そのことをこの神のみことばから学んで行きます。悔いのない人生を送るために、パウロはピリピ教会のクリスチャンたちに対してアドバイスを与えています。パウロは愛するこのピリピにある教会のクリスチャンたちに奨励を与え、激励を与えています。そのパウロのメッセージをこれから見て行きます。

12節にこのようにあります。「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、」と、パウロはこのピリピのクリスチャンたちを非常に愛していました。パウロのために贈り物をしたのは彼らでした。パウロのことをいつも心に掛けていたのも彼らでした。最初にパウロがヨーロッパに渡ったときに訪れた町のひとつです。そのピリピにあって多くの人がイエスを信じ、そして、彼らは主に対して従順に歩んでいた、そのことをパウロは目の当たりにして、それを本当に喜んでいたのでした。今パウロは彼らのところにいません、ローマにいます。ローマで投獄されていたのです。そのパウロが彼らに対して望んだことは「私がいなくなった今、今まで以上に、私が知っている以上に、従順であってください」ということでした。より主に対して従順であるように、忠実であるようにというのがパウロの願いであり、そのことを彼は愛する兄弟たちに励ましをするのです。「従順でありなさい」と、これは神のみこころに従って生きることです。というのは、そのように従順に生きていた彼らですが、それでもなお彼らは問題を抱えていました。厄介なのは人間であって人間が集まるときに必ずそこに問題が生じます。その原因はすべて罪です。罪人である私たちが集まるときには、この教会の中にあっても、さまざまな問題が起こるのです。それでパウロは、彼らにこの2章で、イエス・キリストご自身のその歩みという最高の模範を示されるのです。2：5-8、**「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。：6 キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、：7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。：8 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」**。イエスは神でありながら人としてこの世にお見えになった、そして、死にまで、あの十字架にまで従順に従って行かれた、神がこのように歩まれた、子なる神イエス・キリストは父なる神のみこころに従って従順に歩んで来られた、それがあなたがたが見習うべき模範であると、パウロは教えるのです。だから、彼が言いたかったことは、イエス・キリストが歩んだようにあなたたちもイエスの模範に倣って歩んで行きなさいということでした。私たち一人ひとりがそのように歩んで行くなら、それが一番良い問題の解決方法なのです。教会がパウロが望んだように一つになって行くため必要なことは、いろいろなプログラムを作ったり、いろいろなことを教えるよりも、もう学びを受けている私たち一人ひとりが神のみこころに従って生きて行くことです。そのときに、その人が一致や和を作り出す者になって行きます。その人が祝福をもたらす人になって行きます。分裂や仲間割れや問題や争いをもたらす人物ではなくて、祝福をもたらす人物になって行くのです。だから、私たち一人ひとりが変わって来なければならないのです。パウロがこのピリピのクリスチャンたちに望んだことは、いろいろな問題を抱え、教会の中に、恐らく音楽に関する争いではなかったかと言われていますが、問題が何であれ、争い、諍いがあっても、その中にいるあなたは何が神のみこころであるかを考えて、神が喜ばれることをして行きなさい、それがあなたにとって最も大切なことであると教えるのです。パウロが傍にいたときはパウロに頼って生きることができました。今、パウロがいなくなったのです。しっかり神を見て、神の前に何が正しいのかを考えて、すなわち、神のみこころが何であるかを考えて、それに従って歩んで行きなさいと。信仰のひとり立ちです。そのことをパウロはここで彼らに勧めるのです。パウロが見たかったこと、それはこのピリピの人たちがますます神に対して忠実に、主のみこころに従順に従って行くことでした。そして、それはパウロがこのピリピの人たちだけでなく、すべての教会に、すべての時代のクリスチャンに望んでいることです。なぜなら、それは神ご自身が望んでおられることだからです。

今までのことをもう一度繰り返すと、私たちクリスチャンに神が望んでおられることは、どんなときでも何をするのが神の前に正しいことなのか、何をするのが神に喜ばれることなのか、そのことを考えて正しいことを選択して行くことです。人がどう思うか、世の中がどう思うかではない、神がどう思われるかです。そのような従順な生き方をパウロは奨励するのですが、12節の後半のところから、この従順の歩みのために、従順に歩んで行くために大切なことを四つ教えてください。

☆従順な歩みのために必要なこと

1. 忍耐

12節の後半に「**恐れおののいて自分の救いを達成してください。**」とあります。もちろん、ここで言っている「**救い**」は罪のさばきからの救いではなくクリスチャン生活のことです。私たちが日々の歩みにおいて、私たちがしたいと望んでいることと相反する罪を私たちは残念ながら犯して行くわけですが、その罪からのきよめのことです。聖化ということばを使いますが、つまり、きよくなって行く、イエスに似た者になって行く、その救いのことを言っているのです。確かに、私たちがイエス・キリストを救い主と信じて罪が完全に赦されて、神の子どもとされたときに、神は私たちを罪から解放して下さっただけでなく、私たちをキリストに似た者に変えようとする働きを始められたのです。ですから、ここに「**達成する**」ということばがあります。このことばの意味は、ある特定の仕事、目標のために努力をはらって完成する、達成するという意味です。しかもこのことばの時制は現在形で記されているので、「努力をはらい続けるように」、そのようなことを「**継続して行なって行くように**」ということばです。だから、先に言ったように、これはイエスを信じて罪のさばきから救われるというその救い、「義認」、正しいと認められる、きよいと認められるというその救いではないと言えるのです。「聖化」、私たちがよりキリストに似た者へと変えられて行く、その救いのことをパウロはここで言っているのです。

私たちクリスチャンがしっかり覚えなければいけないことは、神が私たちを救って下さったなら、その瞬間から、神は私たちを変えようとしておられるということばです。私たちがイエスを信じることによって、神との和解ができ神の子どもとなった、同時に、神は私たちをキリストに似た者に変えようとして働かれるのです。そして、その働きが完成するのは私たちがイエスにお会いしたときです。しかし、そのときまでこの地上にあって、神は私たちを変え続けようとしておられるのです。考えるべきことは、イエスが何のためにいのちを捨てられたのか、あの十字架にかかれたのかです。前回見たように、私たちがこの方のために生きるためです。この神のすばらしさを人々に知らせるためです。そのために私たちは伝道するのです。こんなすごい神がいること、こんなすばらしい救いがあることを伝えようとし、神のみこころが記されている聖書を人々に教えて行こうとし、神から与えられている特別の賜物を神のために用いようと、教会の中で仕え合って行きます。確かに、このような働きを通して私たちはこの神のすばらしさを明らかにして行くことができるのです。これは非常に大切な働きです。しかし同時に、私たちがキリストに似た者へと変えられて行くことによって、私たちは神のすばらしさを証して行くことができるのです。どちらかという、実はこのほうが大切なのです。というのは、私たちがなす働きに正しい動機がなくても、奉仕、働きはできるのです。奉仕はいくらでもできます。しかし、このようにキリストに似た者へと変えられて行く、この働きが為されるためには私たちの心が正しくなければならぬのです。そして、私たちの心が神の前に正しければ、今まで見てきたような働きは自然に生まれてくるのです。私たちは偽善者として生きて行くことはできます。やっていることと心が全く違う状態でも、もちろん神は私たちの心を責められますが、それを無視して自らを偽って生きることもある程度はできるのです。それがクリスチャンであるならその人は非常に苦しみます。もし苦しまなければ、その人にうちには初めから救いがなかったのかもしれない。いずれにせよ、私たちがいろいろな働きを為して行くときに、間違った動機をもっていても働きを為すことができる、しかし、私たちがキリストに似た者へと変えられて行くために必要なことは、私たちの心が神の前に正しくなければならぬのです。心が正しければ、私たちの内側が変わってくるし、私たちが変わってくるし、行ないが変わって来るのです。そのことをみことばは私たちに繰り返し教えてくれるのです。みことばの中に、御霊の実といって九つの実が出てきます。愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものをもつ者へと私たちは変えられて行くのです。成長して行くのです。そのために必要なことは、私たちが忍耐を持って信仰者としての歩みを継続して行くことです。このようなことばを聞いたことがあります。インスタントラーメン世代って、つまり、忍耐がないというのです。3分以上待てないのです。私たちクリスチャンも忍耐をもって歩み続けることがなかなかできない、信仰の歩みを継続し続けることは非常に難しいことです。私たちが期待することは今日何かしたら、今日すぐ結果を見たいのです。今日すぐ信仰の成熟した者になりたいと。残念ながらそのようにはならないのです。信仰は時間がかかるものです。私たちがしっかり覚えるべきことは、信仰の歩みは忍耐が必要だということばです。信仰の

戦いは長期戦なのです。レースは長丁場なのです。だから、忍耐をもって日々の生活にみことばの教えを生かして行くことが必要です。これだけ歩んでいるのになかなか変わらないとあなたは思うかもしれませんが、しかし、神があなたに望んでおられることは「継続してそのように生きて行きなさい」です。よく引退したスポーツ選手が口にするのは、戦う意欲が無くなったと、意欲が無くなったと言います。私たち信仰のレースを戦っている者も気を付けなければいけないことは、そういう意欲を失ってしまうことです。もう天国に行けるからそれでいい、神が救ってくれたのだからそれでいいと、そのような選択をした人には神が備えてくださった大きな祝福を逃してしまうということを、私たちは覚えなければいけません。

2. 恐れ

12節に「**恐れおののいて**」と記されています。半端な心によってではなく、すべてを込めてやりなさい、尊敬と畏怖の念をもって、すなわち、如何なる面でも神に反することをしたくないとする思いです。そのような思いが必要だと言います。私たちが神に従順に従って行こうとするときに必要なのは、このような神に対する思いです。パークレーという神学者はこのことばにこのような説明を加えています。「神を悲しませ神を失望させることから生じる恐れとおののきである。私たちがだれかを本当に愛するのなら、その人が何をしてくれるかということなどは気にしない、むしろ、私たちがその人のために何をして上げられるかを心がける。愛の恐怖は懲らしめを受けるかもしれないと思う恐れではない。それは私たちがだれかを傷つけはしまいかと思う恐れである。キリスト者が恐れるただ一つのは、神を傷つけキリストを再び十字架につけはしまいかということである」と。神を失望させることはないか？神を悲しませることを私はしていないか？そういうことを私たちは自らに問い掛けなければならないのです。どうでしょう？あなたの信仰生活は、神を悲しませたり神を失望させるようなものではありませんか？日々、個人的に神との時間を持つこと、聖書を読むこと、祈ること、礼拝に出席すること、集会に出席すること、献金すること、伝道すること、皆すばらしいことです。しかし、私たちは考えなければなりません。そのような働きをどのような心でしているかです。神が望んでおられることは、私たちの心が神の前に正しくあることです。正しい動機をもって正しいことをしているかどうかです。神に対して尊敬と畏怖の念をもちながら主に従おうとしているかどうか、神の関心はそこにあるのです。パウロが望んだことは、このピリピにいるクリスチャンたちがこのような正しい動機を持って、このような正しい心をもって主に仕えることでした。そこで、多くのクリスチャンたちが、神に従順であり続けなさい、神が望んでおられることを忠実に行なうて行きなさいと聞くと、まず考えることは、「自分にはそれは無理だ、そのようにしているクリスチャンはすばらしいけれど、私は弱いからできない」と。私たちはみことばをこのように聞いていますが、神はみことばによってご自身がどういうお方であるか、ご自身のみこころが何であるかを私たちに示しておられます。礼拝者として私たちはその神が示されたみこころに対してそのようにして行くこと、そのように生きて行くという選択をします。そして、その正しい選択によって神を崇めるのです。しかし、私たちが神のいわれることに「できない、無理です」というなら、パウロが次に教える大切なことに目を留めてください。

3. 力

13節を見てください。「**神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。**」と、私たちには力が与えられているのです。助けが与えられているのです。この箇所パウロは、どうして神に従順に従って行くことが可能なのか、その理由を教えるのです。それは神の力があなたに与えられているからだと言います。神は私たち一人ひとりに何が必要かをご存じです。だから、救い主を与えてくださったのです。罪の赦しが必要だったからです。クリスチャンであろうとなかろうと関係なく、神は太陽を与え雨を与えすばらしい恵みを与えてくださっているのです。同時に、神はクリスチャンたちに対して、その信仰が成長するために最善を為し続けてくださっています。だから、私たちがイエスに従って歩んで行くときに、神はいろいろなことを私たちの人生にもたらしてください、そのすべては私たちの信仰が成長するためです。そのときには私たちに分からなくても神はご自身の目的に基づいてすべてのことをしてくださっているのです。何が必要であるか、何が最善であるかをご存じである神は、その完全なみこころに基づいて信者のうちに働きを続けておられるのです。だから「**みこころのままに、あなたがたのうちに働いて**」とあるのです。この時制を見ると、神はみこころのままに私たちのうちに働き続けておられるということです。神の働きは継続しているのです。どんな働きでしょう？二つのことをパウロは教えています。(1) 志を立てさせる＝神はあなたの心の中に働いてあなたに願いを与えるということです。神に従って行きたい、従って行こうという願いです。ここでパウロが言っていることは、神は私たち一人ひとりのうちに働いてくださる、働き続けてくださる、どのように？私たちの心のうちに神に従って行きたいという願いを与えてくださる、そして、(2) 事を行なわせてくださる＝これは「働いて」と同じことばです。エネルギーです。その願いを実践する力を神

は私たちに与えてくださっているということです。そこまで私たちの弱さを知っておられるのです。そのようにみことばは私たちに教えてくれているのです。自分の力で頑張ってもやらないと神は言っているのではありません。神は私たちがどんなに弱く愚かであるかをご存じです。そこで神は、私たちの心の中に神に従い神のみこころを行なって行きたい、そういう思いをくださるだけでなく、それを実践する力を与えてくださっているのです。ですから、あなたが神とともに歩んでいるなら、神のみこころを知り、それに従って行こうという願いが与えられます。神があなたのうちに働いておられるからです。しかも、あなたは神とともに正しく歩んでいるからそのような願いを持つのです。

そして、多くのクリスチャンが躓いてしまうのは、分かりました頑張りますと言ってそこから自分の力でやろうとするのです。そして私たちが経験するのは失敗です。挫折です。みことばはそのようなことを教えていないのです。神が働いてあなたのうちに志を立てさせてくださって、それを神の力によって実践できるように働いてくださるのです。私たちはどうすればいいのでしょうか？自分の力に頼って神のみこころを行なおうとするのではなく、神が備えてくださる力によって神のみこころを行なおうとするのです。だから、みこころが示されたら私たちはそれを行なって行きたいから、あなたの力によって実践させてくださいと願うのです。そのようにして私たちは神の力によって生きる歩みを学んで行くのです。私たちは生まれながらに自分の力で頑張ろう自分の力でやろうということから、なかなか離れられないのです。そして、いろいろなことを自分の力で達成してきた人たちはますます難しくなってきます。これだけ自分の力でやってきたと、実は神が助けてくださったのですが、なかなか神に委ねようとしない、プライドが邪魔するのです。神が教えてくださっていること、それは私たちは弱いも者だということです。私たちはいろいろなときに経験しますが、自分の力ではどうにもできないことがあふれています。神のあわれみであって、神が私たちに私たちは力のないものである、私たちが神の前に従順に歩んで行くためには神の力、助けが必要だということをしかり覚えるように、そして、その力は私たちにもう備えられていることを覚えて行きなさいと、そこまで神は為してくださっていると教えるのです。エペソ人への手紙2：10を見てください。「**私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。**」、私たちは神の作品であるということです。イエスを信じた私たちは神によって造り変えられたのです。その目的は「**良い行ないをするために**」です。かつて私たちは、自分のために良いと思うことを選択してきたのですが、神によって新しく造り変えられてからは、神に喜ばれることを行なう者へと生まれ変わったのです。そしてその後「**神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。**」と、神は私たちが歩んで行く道を示してくださり、私たちがその道を歩んで行けるように助けてくださるということです。神が与えてくださる信仰とはそういうものなのです。神が私たちに罪から救い出してくださただけでなく、神が私たちを変え続けてくださるのです。しかも、神は私たちの心の中に働いて、私たちが神に従って行きたいという願いをもち、その歩みを為して行くように必要なものをすべて備えてくださっているのです。

4. 行動

14節に「**すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。**」とあります。従順な歩みのために必要なことの四つ目は行動です。第一歩を踏み出さなさいと言います。「**すべてのことを、つぶやかず、…行ないなさい。**」と、このことばは、イスラエルの民がエジプトを出て荒野をさまよっているときに、いろいろな機会に彼らは、神に対してモーセに対してアロンに対してつぶやいたのです。彼らは紅海を渡ってシュルの荒野を三日間旅していました。暑いところです。水がなかった、彼らはマラというところにやって来ました。水が飲めると思ったらその水は苦くて飲めなかったのです。そこで民はモーセに対してつぶやくのです。そのところからこの14節のことばが出て来ているのです、「**すべてのことを、つぶやかず、**」と。パークレーはこのように訳しています。「この『つぶやく』というギリシャ語は擬声語で、人々が自分たちの指導者を信頼せず、まさに謀反を起こさんとして指導者たちに反抗している暴徒が発する、脅迫的な不平不満に満ちたつぶやき声である」と言います。彼らが不平不満を言うウーということばをそのまま使っているのです。

もう一つのことばは「**すべてのことを、…疑わずに行ないなさい。**」です。同じようにパークレーは「このことばは役に立たない異議を唱えたり論争したり、悪意に満ちた疑いやためらいを感じることを意味する。キリスト者の人生には全き献身による確信と全き信頼によって生きる確信と平安がある」と。不平不満を持っているとそれが異議や異論に発展して行きます。そういったことがあってはならないとパウロが彼らに与えた命令なのです。パウロがここで人々に教えたことは、神はあなたがたにいろいろなことを教えてくださるし、いろいろなことを命じてくださる、そのときに、一番問題なのは、できないとか、無理だとかと不平不満を言うことだと言うのです。なぜなら、イスラエルの民が旅をしていたとき、彼らは神によって守られていたことが分かっていたはずで、神の大きな奇蹟を見てきたのです。

神が必ず私たちが養ってくださると、そのような確信をもって一時歩んだはずですが、しかし、現実の問題に遭遇したときに、その確信が吹っ飛んでしまって疑いの思いが出てきた、そうすると彼らの心の中には神に対する不平不満がいっぱいになって、神に対して文句を言い始めるのです。そんなことがあってはならないのです。そうすると、神があなたに示してくださっていることに対して、もしあなたがそれはダメ、無理、不可能、といろいろなことを言って、神があなたにせよと言うことに対して、逆らおうとするなら、神の命令に逆らうことになるのです。非常に大切なところです。

私たちに必要なこと、もう一度思い出してください。何のために私たちは生かされているのか、何のために救われたのかです。私たちのすばらしさを人々に示すためでしょうか？違います。私たちのような者を救ってくださった神のすばらしさを示すのです。それなら、その神のすばらしさが明らかにされる方法とはどのような方法でしょうか？それは神が私たちを用いてくださることによってです。神が年若いあなたを使ってくださることによって、神が病の床にあるあなたを使ってくださることによって、神が問題を抱えているあなたを使ってくださることによって、年齢とか性別とか健康状態などは関係ないのです。私たちに必要なことは「主よ、どうぞ私を使ってください。私はあなたのすばらしさを証するために救われた者です。そして、あなたがしなさいと命じてくださることを私はします、あなたの力が与えられていることを信じます。どうぞ私を使ってください。」と、そのとき神があなたを通してみわざを為してくださり、神のみ力を示し、神の栄光を現わしてくださるのです。その道具としてあなたは使われるのです。だから、つぶやいてはならない、神の言われたことを疑ってはならないと言うのです。神が言われたことが私のうちに為されますようにと願うことです。ちょうどマリヤがそうでした。

「あなたのおことばどおりこの身になりますように。」と。あなたはそのような信仰者でしょうか？

シカゴ教会の牧師であったウォーレン・ウォズビーという人が「クリスチャンの生活は浮き沈みの連続ではない、それはむしろ内と外の作用である、神は私たちの内側に働かれ私たちは外に向かって働いて行く」と言います。今、私たちが見てきたことです。神は私たちの内側に働いてくださり私たちのうちに思いをくださるのです。私たちに必要なことはそれをもって出て行くことです。神があなたを通して為そうとしておられる働きを実践する者になって行くことです。それがクリスチャンの生き方です。

今、私たちは四つのことを見て来ました。パウロは陸上の競技であったり、格闘であったりとスポーツのレースに当てはめて私たちの歩みを考えていました。まず私たちはコースを知ることです。マラソンに出るとき自分の走るべきコースをしっかりと知っていなければいけない。次にレースに備えて自分の心を整えなければいけません。いろいろな思いがあっては走れません。正しい動機をもつことです。そして、私たちは力を得ることが必要です。力がどこにあるのか知ることです。その力は自分のうちにはないのです。神の力です。そして、四つ目に必要なことはそのようなことをした上でスタートするのです。走り始めるのです。それがなければいつまで経っても信仰のレースは始まらないのです。あなたが止まっていたら何も起こらないのです。

そして、15節から18節まで、パウロの激励が書かれています。「**15それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中であって傷のない神の子どもとなり、16いのちのことばをしっかりと握って、彼らの間で世の光として輝くためです。**」と、私たちが神のみこころに従順に従って行くなら、(1) 主の証をなすことができるのです。救われた目的を果たして行くことになると言うのです。世から非難されるところのないきよい者となると、もちろん完全にではありませんが、ここで「**非難されるところのない純真な者**」とあるのは、この世の中であって私たちが神の前に正しい生き方をすることによって人々はそれを見て非難できないと言うのです。神の子どもとして神に背を向けているこの世であって良き証を為して行くのです。そして、福音のすばらしいメッセージを語り神のすばらしさをことばと生き方をもって、世の人々に明らかにして行くのです。そして、私たちがそのように歩んで行くなら、(2) 主の報いがあると言います。「**16そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦勞したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることが出来ます。**」と、神からのすばらしいほうびをいただくのです。神のみこころに従順に従って行く生き方、それこそが悔いのない人生を送る生き方です。そして(3) 主の喜びがあります。「**17 たとい私が、あなたがたの信仰の供え物と礼拝とともに、注ぎの供え物となっても、私は喜びます。あなたがたすべてとともに喜びます。**」と、パウロはあなたたちのために自分のいのちが奪われるようなことになっても「**私は喜ぶ**」と言います。彼はこの時、ローマの獄中であっていつ処刑されるか分からない状態でしたが、その状況が彼から喜びを奪うことはできなかったのです。つまり、彼は主のみこころに従順に従って来たゆえに神から本当の喜びをもって生きていたのです。そして、私たちが同じように生きて行くならこの喜びをもって生きて行けるのです。「**18 あなたがたも同じように喜んでください。私といっしょに喜んでください。**」と。

これがパウロがピリピ教会の愛する人たちに送ったメッセージです。「従順でありなさい」、それが

悔いのない人生を送るために必要なことだとパウロは教えました。私たちはいつもこの場で神からいろいろなチャレンジを受けます。神は私たち一人ひとりに違った働きをなされます。どのような働きであったとしても、みこころが示されたときに神が私たちに問い掛けることは、「あなたはわたしに従うかどうか？」です。どうぞ、主に従う者としてこの1年も歩んで行きましょう。それこそ、悔いのない人生を送る生き方ですから。この新しい1年も主が一人ひとりを祝してくださって、主の栄光を現わす器として用いてくださることを心から願います。